

神の民に対する「神の怒り」 —イザヤ書 1-12 章における考察—

三好 明

はじめに

「神の怒り」というテーマが近代のキリスト教会の歴史において果たした役割は、決して小さなものではなかった。たとえば、ジョナサン・エドワーズの「怒れる神の御手の中にある罪人」という説教は、18 世紀における信仰の大覚醒を促した説教としてよく知られている¹。しかしながら、このテーマは日本のキリスト教会においてどのように受け止められてきたであろうか。「神の怒り」が記されている聖書の箇所があっても、あまり講壇から語られてこなかったのではないだろうか。「神の怒り」について考察することは、説教の務めを与えられた者にとって重要な課題であろうと思われる。本研究は、この無視されがちなテーマを、最初にその 20 世紀以降における研究史を紹介し、その後、そこにおいて欠けていると見られる点を考慮しつつ、イザヤ書 1-12 章を例に考察しようとするものである。

1. 研究史と問題の所在

旧約聖書における「神の怒り」について考察するときに、参照しなければならない 20 世紀における二つの重要な著作がある。その一つは、ルードルフ・オットーの『聖なるもの』であり、もう一つはアブラハム・ヘッschelの『イスラエル預言者』である。

¹ ジョナサン・エドワーズ『説教 怒れる神の御手の中にある罪人』（飯島徹訳、CLC 出版、1991 年）

オットーは、キリスト教の神には合理的な述語で汲み尽くすことのできない「非合理的なもの」(das Irrationale)があることを主張し、そこから受ける非合理的な宗教的体験を、神的なものを表すラテン語のヌーメンに基づき「ヌミノーゼ」(das Numinose)と呼んだ。そして、このヌミノーゼを引き起こすものとして旧約聖書における「神の怒り」を挙げたのである。オットーは、「神の怒り」が「隠された自然力」のような「もともと道徳的な特性とは何の関係も持っていない」ものであるとし、旧約聖書の神「ヤハウェは『測り難く』また『勝手気まま』である」と断じた²。すなわち、オットーは旧約聖書における「神の怒り」を、人間には理解できない非合理的で恐るべきものと考えたのである。

これに対して、ユダヤ人の神学者アブラハム・ヘッセルは「神的熱情」(Divine Pathos)こそが預言者の神理解の中心であり³、「熱情は、本来的に非合理的なものであるどころか、預言者が情緒的かつ道義的に理解しうる一状態である」と主張した⁴。ヘッセルは、「神の怒り」を「隠された自然力」のようなものとするオットーの理解を「預言者の思惟をまったく歪めるもの」として退けて、「正義、すなわちミシュパートが神の怒りの尺度である。人間の残酷さの犠牲にされた人びとに対する神の同情が神の怒りの動因である」と述べた。ヘッセルによれば、「神の怒り」は「憐れみが再び姿を現わす機会を待っている」「幕間劇」のようなもので、「中断された愛」「引き止められた憐れみ」「身を隠した慈悲」である⁵。

このようにオットーとヘッセルは「神の怒り」をめぐるまったく異なる見解をもっていた。その後の旧約聖書学の展開を見れば、ヘッセルの方が圧倒的に強い影響力をもっていると言えるであろう⁶。ただし、ヘッセルは

² ルードルフ・オットー『聖なるもの』(華園聴齋訳、創元社、2005年) 38頁

³ アブラハム・ヘッセル『イスラエル預言者』下(森泉弘次訳、教文館、1992年) 15頁

⁴ ヘッセル、前掲書、21頁

⁵ ヘッセル、前掲書、117頁

⁶ ヘッセルが後の聖書神学、特にフレットハイムとブルッゲマンに及ぼした影響については、M. R. Schlimg, "Different Perspectives on Divine Pathos: An Examination of Hermeneutics in Biblical Theology," *CBQ* 69 (2007) 673-694 に詳しい。なお、オットー

「聖書における聖なるものは不気味なものの同義語ではない」というように⁷、オットーに対するアンティテーゼを主張するのであるが、「聖なるもの」すなわち神の「聖」が「神の怒り」にどのように関係しているかということについては説明していない。

1990年代以降、旧約聖書における「神の怒り」についての多くの専門研究が発表されるようになった⁸。まず、1992年にブルース・エドワード・バロイアンによる *Anger in the Old Testament* (旧約聖書における怒り) が出版された⁹。バロイアンは、旧約聖書全体にわたって387箇所の「神の怒り」のモチーフを抜き出し、それぞれについて共時的に、その動機、対象、結果、そして用いられているヘブル語を挙げて整理した。バロイアンによれば、「神の怒り」の理由は、第一に、人間が他の人間に対して過酷であることによって神の正義が傷つけられるからであり、第二に、神御自身に対する忠誠を求めることが正しいことであるからである¹⁰。バロイアンにおいても、神の「聖」と「神の怒り」の関係については、特に論じられていない。

通時的研究としては、1998年のカリ・ラトヴスによる *God, Anger, and Ideology: The Anger of God in Joshua and Judges in Relation to Deuteronomy and the*

トーの見解もある程度受容されてきたことを忘れてはならない。ルドルフ・キッテルの編纂した『新約聖書神学事典』の ὀργή (怒り) の項目において、ヨハネス・フィヒトナーはオットーとパウル・フォルツを参照しつつ「神の怒り」の動機が「ヤハウェの思いもよらない力と『聖』」であることを肯定し、「神の怒りは支配への絶対的要求を主張し確立する聖なる神の攻撃である」と述べている。ただし、フィヒトナーは「神の怒り」が「ヤハウェの傷つけられた聖なる愛の表現として宣言されている」とも述べており、オットーの見解を受容しつつ修正しようとしたことがうかがわれる。Johannes Fichtner, "ὀργή, The Wrath of God," *TDNT* 5:402, 407-409.

⁷ ヘッセル、前掲書、21頁

⁸ 旧約聖書における「神の怒り」についての先行研究の概観は、拙稿「なぜ神は怒られるのか—これまでの研究と新たな研究の試み—」日本キリスト教会神学校『教会の神学』第23号、1-26頁を参照。なお、さらに包括的な研究史については、後述する Stefan H. Wälchli の *Gottes Zorn in den Psalmen* の序論の部分に詳しく記されている。

⁹ Bruce Edward Baloiian, *Anger in the Old Testament* (New York: Peter Lang, 1992).

¹⁰ Ibid., 176-178.